

出エジプト記8章20節—9章12節 「裁きの中の救い」

1A アブの群れ 20-32

1B 区別する贖い 20-24

2B 国内でのいけにえ 25-32

2A 家畜への重い疫病 1-7

3A 膿の出る腫れ物 8-12

本文

出エジプト記8章を開いてください。私たちは前回の学びから、エジプトに下った十の災いを読み始めています。モーセとアロンがパロのところに行き、杖を蛇に変える徴を見せました。すると、パロに付いている呪法師たちも同じことを示しました。そのことによって、ファラオは心を硬くして、「わたしの民を出て行かせなさい」という神の声に聞き従いませんでした。それで神は、エジプトに十の災いを下されます。十という数字は「試す」という意味合いがありますが、主はエジプトを試されています。

しかし、その杖を蛇に変える徴において、また初めの三つの災いにおいて明白だったのは、「悪の力よりも偉大な神の力」であります。呪法師らが変えた蛇をモーセとアロンの蛇のほうが飲み込んでしまいました。そして、主は力強く、エジプトで大切にされ、神々とあがめられているものに対して、強い力を表されます。

第一に、エジプトの命そのものであるナイルを神は血に変えられました。それはあたかも、ナイル川を司るクニムという神、またナイル川の化身であるハピが血を流されたというのと等しいです。神は、彼らが誇りにしているもの、その力を打ち砕くことによって、「わたし、主こそが神なのだ」ということを表してくださいました。そして第二の災いは、かえるでした。ナイル川でその豊かさを象徴するものであり、ケトという女神としてあがめられていましたが、それがファラオや家来たちの家の中、寝室の中、厨房の中にまで入り込んでいったのです。ナイル川の時エジプトの民が苦しんでも心を動かさなかったがラオも、この時は、「祈ってくれ」とモーセに頼んだのです。そして第三は、地面の塵がブヨとなったことです。自分たちが拠り頼んでいる地面そのものが、自分たちの体に蚊のようにして付いて来ました。豊かなもの、命を与えるもの、自分たちを支えるものがすべて災いとなっていったのです。

そして、その第三の災いにおいて、呪法師たちが真似ができなかったのです。「これは神の指です」と叫びました。このようにして初めの三つの災いにおいて、神は悪の力に対してご自分が力を持っていることを示されました。これによって、災いの一周期が終わりました。今晚見るのは、二周

期であります。

1A アブの群れ 20-32

1B 区別する贖い 20-24

20 【主】はモーセに言われた。「明日の朝早く、ファラオの前に出よ。見よ、彼は水辺に出て来る。彼にこう言え。【主】はこう言われる。『わたしの民を去らせ、彼らがわたしに仕えるようにせよ。21 もしもわたしの民を去らせないなら、わたしは、あなたと、あなたの家臣と民、そしてあなたの家々にアブの群れを送る。エジプトの家々も、彼らのいる地面も、アブの群れで満ちる。



第四の災いは、アブです。初めに、朝早く、ファラオの前に出て行くために、ナイルの水辺に行っています。前回話しましたように、ファラオは日課として川の前で神々に礼拝を捧げるためにナイル川の岸辺に来ていたと考えられます。そしてアブですが、ブヨよりも大きく、血を吸うサシバエです。「ウチヒト」と呼ばれる神としてあがめられていたようです。ナイル川やエジプトの豊かさを、蛙と同じようにアブさえが表しているものだったのでしょうか。しかし、それらが「群れ」で来ています。恩恵を表しているようなものも、多くなりすぎれば災いとなります。そして蛙の時と同じように、これらが家々の中にまで入り込み、痛めつけるのです。

22 わたしはその日、わたしの民がとどまっているゴシェンの地を特別に扱い、そこにはアブの群れがないようにする。こうしてあなたは、わたしがその地のただ中であって【主】であることを知る。
23 わたしは、わたしの民をあなたの民と区別して、贖いをする。明日、このしるしが起こる。』

第二周における災いから始まるのは、この「区別」です。イスラエル人が住んでいるゴシェンの地は、肥沃な地であり、アブがそこにいないというのは奇跡にしか他なりません。しかし、主が彼らには災いが来ないようにして、エジプト人には来るようにするという区別を行われます。そして、それが「贖い」であるのです。

神は区別をされる神です。天地創造において、水を分けてそこを大空とされました。また下の水を分けて乾いたところを陸とし、水のところを海とされました。そして、太陽や月、星を置いて、日、月、そして季節を造られました。そして植物はそれぞれの種にしたがって、種が芽を出して生長し、実を結びます。そして、他のあらゆる被造物とは区別して、神はご自分のかたちに人を造られました。このように神は、区別をすることによってご自分の創造の業を行われました。

そして、これが罪を犯した者たちを赦し、ご自分の裁きから救われる、救いの御業においても同じことを行われるということです。アダムとエバの直後から起こりました。カインの子孫は暴虐に満ちましたが、セツの子孫からノアが出てきました。ノアの乗った箱舟は、水という神の裁きから救わ

れました。そして、アブラハムの時代、ロトがソドムに住んでいたところ、神はロトとその家族を救い出し、それから火と硫黄をソドムとゴモラに降らせました。そして、これから主は、イスラエルの民をエジプトに対する裁きから救われるために、彼らとエジプトの民を区別されるのです。このようにして、神はご自分が救われる民と、そうではなく滅びに至る者とを区別されていきます。

主は、今、神の怒りによって滅びる者と、そうでなく、救われる者との選り分けを行なっておられます。救われる者たちに対して、パウロは励ましと勧めを与えています。「I テサ 5:6-9 ですから、ほかの者たちのように眠っていないで、目を覚まし、身を慎んでいきましょう。眠る者は夜眠り、酔う者は夜酔うのです。しかし、私たちは昼の者なので、信仰と愛の胸当てを着け、救いの望みとかぶとをかぶり、身を慎んでいきましょう。神は、私たちが御怒りを受けるようにではなく、主イエス・キリストによる救いを得るように定めてくださったからです。」患難時代に入っても、額に神の印をつけられている 14 万 4 千人は、害を受けることなく再臨のイエス様に会っているし、救われる者たちと滅びに至る者、この二種類があるのだということを私たちは知る必要があります。

24 【主】はそのようにされた。おびたしいアブの群れが、ファラオの家とその家臣の家に入って来た。エジプトの全土にわたり、地はアブの群れによって荒れ果てた。

ここの言葉、「おびたしい」とあるのは、とてつもない数のアブを表しています。そして、エジプトがこのことによって、「荒れ果てた」とあります。

2B 国内でのいけにえ 25-32

25 ファラオはモーセとアロンを呼び寄せて言った。「さあ、この国の中でおまえたちの神にいけにえを献げよ。」26 モーセは答えた。「それは、ふさわしいことではありません。なぜなら私たちは、私たちの神、【主】に、エジプト人の忌み嫌うものを、いけにえとして献げるからです。もし私たちがエジプト人の忌み嫌うものを、彼らの目の前でいけにえとして献げるなら、彼らは私たちが石で打ち殺しはしないでしょうか。27 私たちは、主が私たちに言われたとおり、荒野へ三日の道のりを行って、私たちの神、【主】にいけにえを献げなければなりません。」

ファラオは、この災いから妥協案を出し始めます。これから何回か、災いの激しさが増すにしたがって、ファラオは妥協案を出しますが、それがとても生々しい、世がキリスト者に差し出す妥協案に似ています。まず、モーセの断りではありますが、これは理にかなっています。エジプト人は、家畜を神々としてあがめていました。それゆえに、それらをいけにえとして捧げるヘブル人のことを、忌み嫌っていました。覚えていますか、ヨセフのところに兄たちがベニヤミンを連れてやってきた時に、食事の席を別々にしていました。「エジプト人は、ヘブル人とはともに食事ができなかったからである。それは、エジプト人が忌み嫌うことであった。(創世 43:32)」とあります。ですから、モーセは国内でいけにえを捧げたら、とんでもないことになる。三日の道のりを開けて、それでエジプト人

の目から離れたところで初めて、いけにえを捧げることができるというものです。

ところが、「この国の中でおまえたちの神にいけにえを献げよ。」とっています。主に仕えるときに、主に捧げるときに、この世にいるままで捧げて行こうとすること自体が、無理があるのです。この世から選り分けられて、神のものとされた民は、この世から別たれているわけですから、世の中にいる生活が変わらないままで、主を礼拝することはできないのです。多くの人たちが、この誘惑を受けています。イエス様を信じるということは、自分が最も大切にしているものであってもそれを捨てるであるとか、変えるということが求められます。イスラエルの民と同じように、エジプトから出て行くという大きな出来事が、霊的に私たちの身にも起こったのですから。

28 ファラオは言った。「では、おまえたちを去らせよう。おまえたちは荒野で、おまえたちの神、【主】にいけにえを献げるがよい。ただ、決して遠くへ行ってはならない。私のために祈ってくれ。」

ファラオは、譲歩しているように見せて妥協を迫っています。「ただ、決して遠くへ行ってはならない。」であります。遠くへ行ってはならない、という誘惑を私たちは受けます。信仰生活をすると、自分のこれまでの生活から遠く離れたような新しい生活になります。それが、そんなに変わることなく近くでいようということになります。

29 モーセは言った。「今、私はあなたのもとから出て行き、【主】に祈ります。明日、アブが、ファラオとその家臣と民から離れます。ただ、ファラオは、民が【主】にいけにえを献げるために去ることを阻んで、再び欺くことなどありませんように。」

モーセはファラオの言うことは聞きますが、彼が既に、蛙のことで欺いていました。彼は、「私と私の民のところから蛙を除くように、主に祈れ。そうすれば、私はこの民を去らせる。主にいけにえを捧げるがよい。(8:8)」とっていました、けれども祈りが聞かれると、心を硬くして、彼らの言うことを聞き入れなかったのです。ですから、再び欺くことなどありませんようにとモーセは言っています。

30 モーセはファラオのもとから出て行って、【主】に祈った。31 【主】はモーセのことばどおりにされた。アブは一匹残らず、ファラオとその家臣、および民から離れた。32 しかし、ファラオはまたも心を硬くし、民を去らせなかった。

結局、ファラオにとって、祈ってもらうということは、アブによる苦痛が取り除けられることであって、主なる神の言うことに聞き従うことではないのです。自分に仕えてもらえるような神であれば受け入れるのですが、自分が仕えるような神ではないのです。私たち人間の姿であります、「このような便益があるから信じて、従うけれども、それがなければ従いません。」という条件を付けているのであれば、それはもはや、その神はまことの天地万物を造られた方ではなく、偶像に他ならない

のです。

2A 家畜への重い疫病 1-7

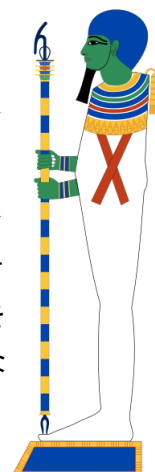
1 【主】はモーセに言われた。「ファラオのところに行って、彼に言え。ヘブル人の神、【主】はこう言われる。『わたしの民を去らせ、彼らがわたしに仕えるようにせよ。2 もしあなたが去らせることを拒み、なおも彼らをとどめておこなら、3 見よ、【主】の手が、野にいるあなたの家畜、馬、ろば、らくだ、牛、羊の上に下り、非常に重い疫病が起こる。

第五の災い、二周期においては第二の災いです。一周期と同じく、初めに警告を神が与えられて災いをくだされます。ここでの大きな特徴は、彼らの大事な財産である家畜に神は御手を下されるということです。これまでの災いでは、痛みや痒みなどはもたらされましたが、ここで初めて彼らの大切な財産に触れられます。「主の手が下る」という言葉に表されています。先に、ナイル川がエジプトにとって命であることを話しましたが、家畜も彼らにとって極めて貴重でした。エジプトの文学や壁画には、家畜が鮮やかに描かれています。日常の生活にとって欠かせない存在であり、それゆえ神聖なものとしてあがめられました。

家畜、馬、ろば、ラクダ、牛、羊に非常に重い疫病が起こっています。これは死亡率の高い疫病で、かなり感染率の高いものであると推測されます。牛や羊の他に、馬がいますが、後に馬はエジプトにおいて最良種のを輸出していることが、ソロモンの王朝で伺い知ることができます。馬は、運搬の他に戦闘に使うもので、武力のためです。また、ラクダは運搬用であり、その地域で最も大きな動物とされ、貿易にも欠かせないものだったのでしょうか。主は、このようにしてご自分が神であることを示されるために、その人に注意喚起を与えられますが、それに応答しないのであれば、徐々にその人の身近にあるものへと触れていき、その声を大きくされていきます。



エジプト人が家畜を神聖なものにしているということについてですが、メンフィスには、プタハという神がアピスという牛として現れたとされていました。エジプトで世界遺産に指定されているメンフィスの墓地遺跡群には、地下に巨大な棺桶がいくつも見つかっています。それがアピスの牛を葬ったものです。そしてアピスはミイラにもされていました。そして羊また牛によって表されていたハトホルという女神がいます。愛と幸運の神です。カナン人が拝んでいたアシュタロテに匹敵します。これらの神々が今、疫病によって打たれたのです。



4 しかし、【主】はイスラエルの家畜とエジプトの家畜を区別するので、イスラエルの子らの家畜は一頭も死なない。』5 また、【主】は時を定めて言われた。「明日、【主】がこの地でこのことを行う。」

主は再び、区別をすることによってご自分の救いを表されます。エジプト人にとっての家畜は神々でありましたが、イスラエル人も飼っており、それらをいけにえとして捧げようと思っていたものでした。ここでも同じく、神の民とされている者たちは神の怒りから免れるのだ、その患難の時から守られるのだということが分かります。そして、先の災いでもそうでしたが、主は時を定めてくださっています。明日、このことを行うと言われることでファラオと家来たちに、この言葉に応答する猶予期間を与えておられるのです。

6 【主】は翌日そのようにされた。エジプトの家畜はことごとく死んだが、イスラエルの子らの家畜は一頭も死ななかった。7 ファラオは使いを送った。すると見よ、イスラエルの家畜は一頭も死んでいなかった。それでもファラオの心は硬く、民を去らせなかった。

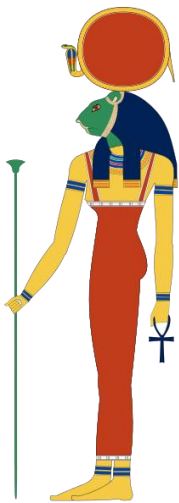
ファラオは使いを送ったということは、確実に、主のことばが気になっていることを表しています。本当に信じていないのであれば、使いなど送らなくてよかったのです。確かめているということは、主のことばが確かにその通りであることを確認できたのです。これが世の不信仰の世界です。明らかにキリスト者の間に行われていることは明白でも、それを認めていても、それでも心を硬くするということを繰り返します。

3A 膿の出る腫れ物 8-12

8 【主】はモーセとアロンに言われた。「あなたがたは、かまどのすすを両手いっぱいに取り。モーセはファラオの前で、それを天に向けてまき散らせ。9 それはエジプト全土にわたって、ほこりとなり、エジプト全土で人と家畜に付き、うみの出る腫れものとなる。」

第六の災い、二周期における第三の災いです。警告なしに行われます、膿の出る腫れ物です。「かまどのすす」をファラオの前でまき散らします。これは、イスラエルの民が奴隷として、かまどを使って煉瓦を作っていたその煉瓦を想起させるものです。主は、イスラエル人を虐げたことに対する報復としてこの災いを下しておられるのかもしれませんが。神の裁きは公平であり、その行ったことに応じて報いを与えられます。「【新改訳 2017】Ⅱテサ 1:6-7 神にとって正しいこととは、あなたがたを苦しめる者には、報いとして苦しみを与え、苦しめられているあなたがたには、私たちとともに、報いとして安息を与えることです。このことは、主イエスが、燃える炎の中に、力ある御使いたちとともに天から現れるときに起こります。」

そして受けている「うみの出る腫れもの」ですが、これはヨブがかかった重い皮膚病に近いもので



しょう。まさに日本語訳のように膿が出てきて流れ出ているようなものです。当時のエジプトでは、伝染病などを司る女神として、セクメトがいました。彼女は、先ほどのアピスという牛として現れたプタハという神の妻です。頭がライオンであり、頭の上に赤い円盤を載せていて、太陽の灼熱を表しています。この彼女を静められるセクメトの神官たちこそが、伝染病などを静める特殊な医師や呪術師とされていました。そこで、この膿の出る腫物を癒すための呪法師の出番なのですが、ところが彼らがもうファラオの前に立てなくなっているのです。

10 それで彼らは、かまどのすすを取ってファラオの前に立ち、モーセはそれを天に向けてまき散らした。すると、それは人と家畜に付き、うみが出る腫れものとなった。11 呪法師たちは、腫れもののためにモーセの前に立てなかった。腫れものが呪法師たちとすべてのエジプト人にできたからである。

第三の災いの時に、既に「これは神の指です」と言って、同じ徴を起こすことができなくなっていました。しつこくファラオは彼らを呼んでいたでしょうか。ついに、この大事な時になって前に出て来られなくなりました。彼らが何もできないということは、この酷い腫物というのは、自分たちの女神セクメトによるものではない、恐ろしい偉大な神の力であることを悟ることができたはず。ところで、この呪法師の名が、ヤンネとヤンブレと言います。旧約聖書には出てきませんが、パウロが彼らの名前を挙げています。「たぶらかしている者たちは、ヤンネとヤンブレがモーセに逆らったように、真理に逆らっており、知性の腐った、信仰の失格者です。(2テモテ 3:8)」真理に逆らうようなことを言う者たちが、教会の中に現れることをパウロは話しているのですが、教会において神の真理ではなく、全く世のこと、肉のことを混ぜ合わせて教えていく者がいるなら、まさにヤンネとヤンブレのような存在です。そして、これら呪法師らは全ての体毛を剃って、体がきれいなことが宗教上必要なことでしたが、彼らに対する怠りなき裁きが、ここで行われているのです。

12 しかし、【主】はファラオの心を頑なにされたので、ファラオは二人の言うことを聞き入れなかった。【主】がモーセに言われたとおりであった。

ついに、ここでファラオが心を硬くしたと書いてあるのではなく、主が彼の心を頑なにされた、とあります。ここまで読んで来られたら分かると思いますが、主は、心を広げようとしている者の心を頑なにしようなどとは決してしません。もう既に心を硬くしている者に対して、その者に対して裁きを行われるために、その心を硬いままに捨て置かれるのです。そして、ご自分の裁きを行われる時に、「頑なにする」ということを行われます。

例えば、ダビデの息子アブサロムが、クーデターを起こして、ダビデを殺そうとした時に、主が介入されています。「Ⅱサム 17:14 アブサロムとイスラエルの人々はみな言った。「アルキ人フシャ

イの助言は、アヒトフェルの助言よりも良い。」これは、【主】がアブサロムにわざわいをもたらそうとして、【主】がアヒトフェルのすぐれた助言を打ち破ろうと定めておられたからである。」アヒトフェルの助言は、天才的なものであり、彼の助言に従えば必ずダビデを殺すことができたのですが、フシャイの助言はアブサロムのうぬぼれた心をくすぐるものでした。そしてそのままにしておかれたのです、そしてアブサロムがフシャイの助言を受け入れるままに捨て置かれたのです。

その他、レハブアムがヤロブアムの願い、税金を軽減してほしいという願いに対して、長老たちの意見ではなく、若者たちの意見を聞くようにさせたのも、「主がそう仕向けられたからである。(1列 12:15)」とあります。もっと昔にさかのぼれば、モーセ率いるイスラエルの民に対して、戦いを挑んだアモリ人シホンの心を頑なにされたのは主です(申 2:30)。ヨシュアらに対して、カナンの人たちが一斉に攻めてきたのも、主がそうされたことがヨシュア記 11 章 20 節にあります。どちらも、主が彼らを倒すためにそうされた、とあります。

ここまで考えますと、主が救いについても、その憐れみの業についても、全く神の主権の中で行われていることを思います。主が触れてくださらなければ、人は決して悔い改めることさえできないのだと思わされます。ローマ 9 章を考えさせられます、「9:15-16 神はモーセに言われました。「わたしはあわれもうと思う者をあわれみ、いつくしもうと思う者をいつくしむ。」ですから、これは人の願いや努力によるのではなく、あわれんでくださる神によるのです。」私たちはただ、神の憐れみの業に感動し、主を恐れかしこむことが必要だということでしょう。

世にある心の頑なさを見る時に、失望してしまうかもしれませんが、神は確実にその頑なさの中にも主権を持っておられ、介在されているのだということを知る必要があります。そして、主は私たちが主に忠実に従っている中で、ご自分の力を表されます。それは人々の心の高ぶりや頼っているものを、露わにして、「あなたがたは、これらのものに拠り頼むことができない、わたしが神なのだ。」と明らかにされるということです。